

## 気滞の病態と治療に関する基礎知識

富山医科薬科大学 和漢薬研究所 和漢薬製剤開発部門 谿 忠人

図1 中国伝統の医療診断(治療薬の選択指針)

生薬の字の色は赤字：熱証用、青字：寒証用を意味している。

証	① 病理	虚証(正気の量と機能不足) 気虚→人参など補気薬の選択指針 血虚→当帰など補血薬の選択指針 陰虚→地黄など補陰薬の選択指針	実証(病邪の過剰・停滞) 気滞→柴胡など理気薬の選択指針 血瘀→桃仁など活血薬の選択指針 水滞→茯苓など利水薬の選択指針
	② 病性	寒証(温めると軽快する症状) →附子など温熱薬の選択指針	熱証(冷やすと軽快する症状) →黄連など寒涼薬の選択指針
	③ 病期	陰病期(主として慢性期の寒証) →温熱薬・補薬の選択指針	陽病期(急性・亜急性期の熱証) →寒涼薬・瀉薬の選択指針
	④ 体力	虚証(体力不足と弱い闘病反応) →人参など補薬の選択指針	実証(体力過剰と強い闘病反応) →大黄など瀉薬の選択指針

図2 気滞：気の循環の失調と停滞(病理の実証) 臓腑と関連して弁証される(ここでは代表的な臓腑を記載した)

気の実証病理：気滞証(気の運行が停滞し臓腑の機能が失調した病態：気鬱に同じ)

肺気滞証(胸苦しい、呼吸困難、咳嗽、喘息) 【気虚と併発】

熱証←前胡

寒証←陳皮、厚朴、桔梗；白前、旋復花

脾胃気滞証(食欲不振、停滞・膨満感、腹痛、嘔気・嘔吐) 【気虚、痰飲、心神不安と併発】

熱証←枳実

寒証←陳皮、厚朴、蘇葉、縮砂、木香、薤白、檳榔子；半夏、呉茱萸、丁香、茴香

肝気鬱結証(イライラ、憂鬱、脇腹のつかえ感、腹部膨満感、生理不順) 【瘀血と併発】

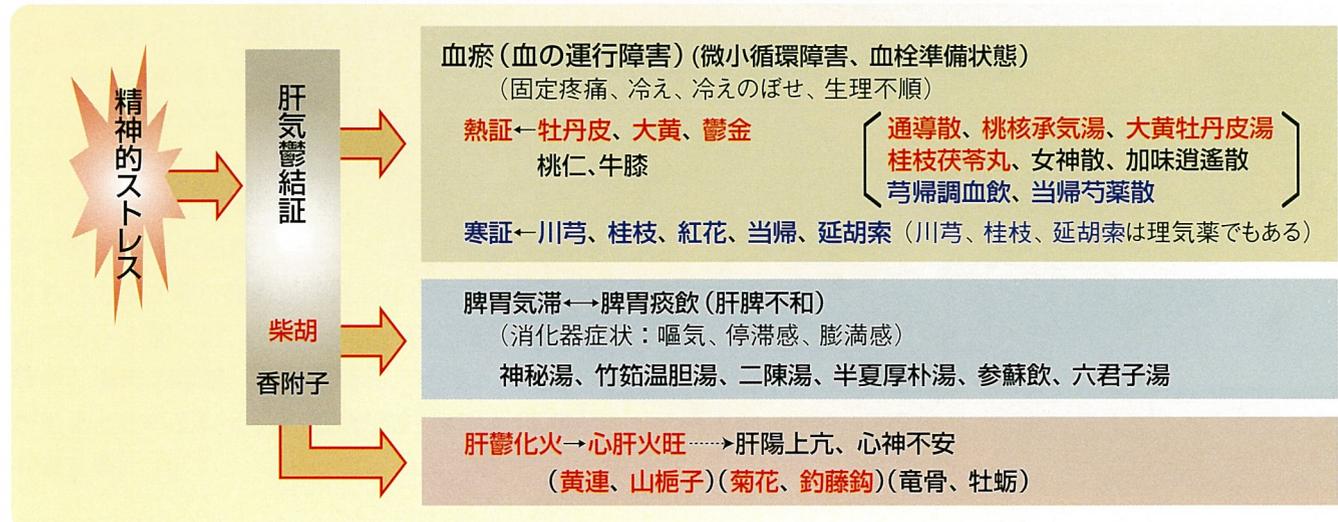
熱証←柴胡、枳実；鬱金、薄荷

香附子

寒証←青皮、烏薬；川芎、延胡索、呉茱萸

四逆散 → 大柴胡湯  
香蘇散 → 小柴胡湯  
加味逍遙散、抑肝散

図3 肝気鬱結証に関連する病理と処方(1)【活血薬は妊娠時には慎重投与】



## 1. 漢方医療診断(図1) 気滞を中心にして

現代の中医学の診断：①病理(臓腑の気・血の過不足：虚証・実証)と②病性の寒証と熱証の診断が主体となります。この歪みを調整する薬能(経験的効能論)を有する生薬を選び「その時点」に適した処方を作成する体系です。

中医学の(病理の)虚実：虚証は正気(気と血の機能)の不足病態です。実証は病邪(気滞、血瘀、水滞)など病理産物の停滞した病態です。この実証は虚証に誘発されることがあります(気虚に伴う痰飲など)。

Q： ①にある病理の陰虚は聞き慣れない言葉ですが？

A： ①の陰虚は中医学の言葉です。陰液(血)が不足し、口の乾燥感など仮の熱証(虚熱証)を呈する病理です。日本漢方の陰虚証は陰証(寒証)の症候を伴う虚証(体力不足)の病態です。

## 2. 気滞を調整する生薬(図2)

気滞：気鬱感、膨満感、疼痛、閉塞感、嘔気などから臓腑の機能停滞から弁証されます。とくに肝気鬱結証がよくみられる病態です。

肝気鬱結証：これが気滞の中心です。精神ストレスが肝気鬱結証の誘因ですから現代医療において慢性疾患の経過や更年期障害などの不定愁訴の治療において重要な病理です。

疏肝解鬱：肝気鬱結証を調整する疏肝解鬱の疏は疎水の疎と同じです。鬱積した気を「すらすらと流す」という意味です。基本処方柴胡を主薬とした四逆散と香附子を主薬とする香蘇散です。

肺気滞証：咳嗽や呼吸困難に用いる理気剤として神秘湯、柴朴湯、竹筴温胆湯、参蘇飲があります。

脾胃気滞証：痰飲証と併発することが多く、二陳湯と半夏厚朴湯が基本処方です。

## 3. 肝気鬱結証に関連する病理1(図3)

血瘀証と活血剤(駆瘀血剤)：気滞が血瘀を誘発するので気滞と血瘀を同時に治療するのが普通です：通導散、桃核承気湯、女神散、治打撲一方、加味逍遙散、芎帰調血飲。

大黄、桂枝、川芎、延胡索にも理気の薬能があります。

痰飲証と化痰剤：脾胃気滞(や気虚)が痰飲を誘発します。気滞と痰飲を同時に治療する処方も有用です。主方は二陳湯や半夏厚朴湯(柴朴湯、茯苓飲合半夏厚朴湯)です：平胃散、六君子湯、神秘湯、参蘇飲、竹筴温胆湯、九味檳榔湯。

### 日本漢方の診断

症候の経過を問診して『傷寒論』の三陰三陽(六病位)の③病期が診断されます。この病期診断に②の病性(寒熱)が含まれています。

さらに④体力や關病反応の程度を(腹力などから)虚実に分類して個性を診断します。この虚実の字義は日本漢方の特色です。

### 日本漢方の(体力の)虚実

關病反応の弱い病態を虚証とし、強い病態を実証とします。この虚証は中医学とほぼ同様ですが、実証は異なります。

### 日本漢方の気血水

気を生命活動エネルギーとし、血を血液循環機能とする点で中医学と同様です。水は中医学の津液(生体中の無色の液体)を意味しています。なお気血水の失調を臓腑と関連付けることはありません。

### 日本漢方の気剤

気鬱に用いる香蘇散、柴胡加竜骨牡蛎湯、半夏厚朴湯など；気逆に用いる加味逍遙散などは中医学の理気剤と同様です。中医学で重視される四逆散は日本では汎用されていません。

### 桂枝剤

また日本漢方では苓桂朮甘湯、桂枝加竜骨牡蛎湯、桂枝人参湯などの桂枝剤を気逆に用いる気剤としています。瘀血に用いる桃核承気湯も桂枝を含むので気剤とすることがあります。

### 日本漢方の病理論

日本漢方では中医学より病理論は重視されませんが、瘀血はよく議論されます。血栓症傾向のあるエコノミークラス症候群が瘀血です。これは糖尿病、経口避妊薬の服用で発症の危険性が高まります。

### 活血剤は妊娠時に投与しない

大黄、牡丹皮、桃仁、紅花などを含む活血剤(駆瘀血剤)は妊婦に投与しないことが望ましい。

### 日本漢方の水毒

消化器系の水滞(痰飲)を日本漢方では胃内停水、水毒と言います。腹診で胃部振水音の所見をとります。

図4 肝気鬱結証に関連する病理と処方(2) (下線は柴胡配合剤)

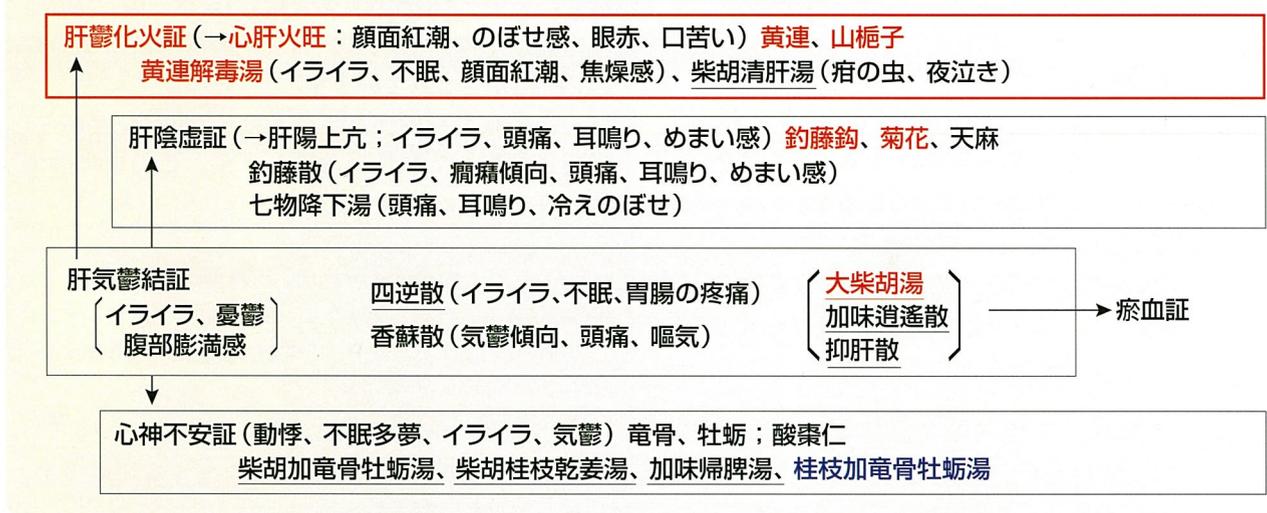


図5 理気(行気)関連処方の日本漢方の分類

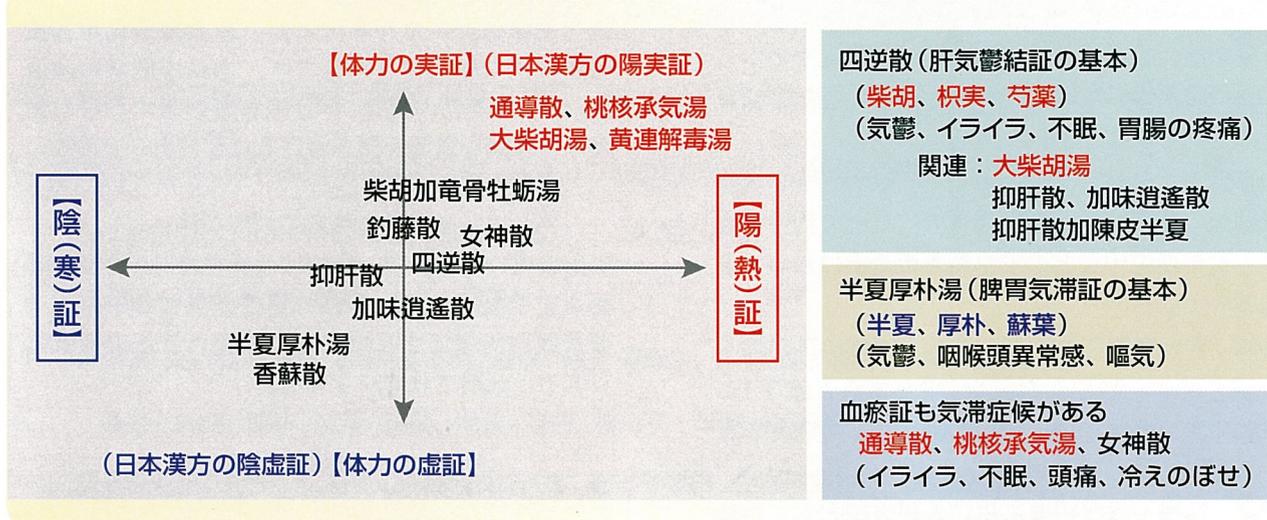
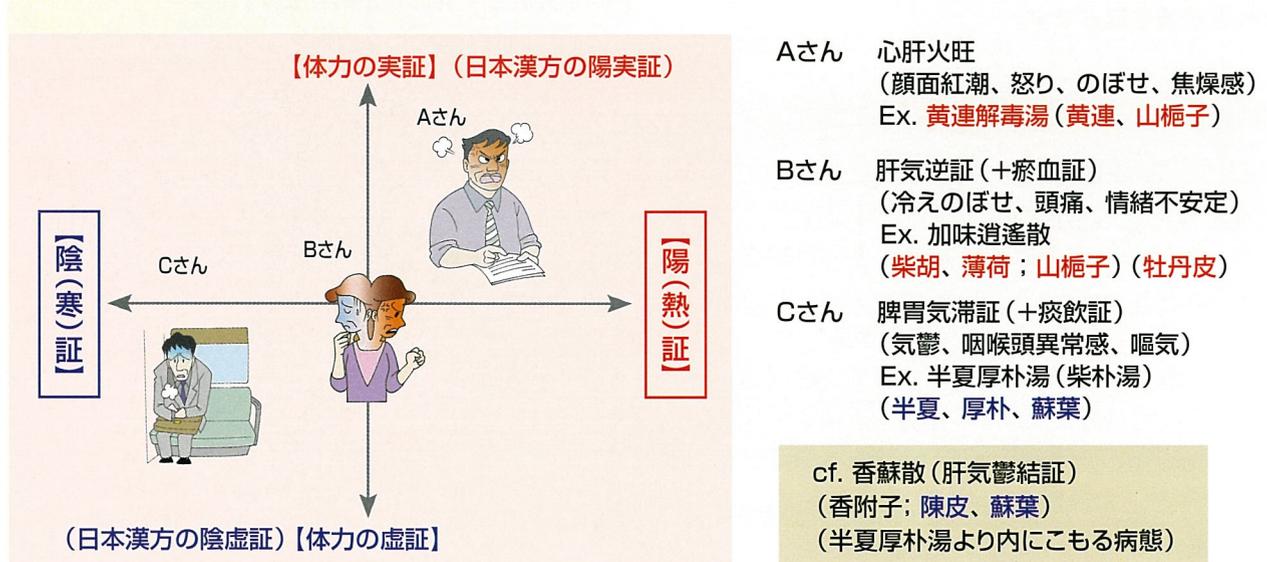


図6 気滞と気逆(気滞に気逆を含める場合もある)



## 4. 肝気鬱結証に関連する病理2(図4)

**心肝火旺証**：気は陽の性質があるので停滞すれば熱がこもると考えます。その病態が**心肝火旺証**です(旺は火が旺盛という意味です)。**黄连**や**山梔子**を配合した**黄连解毒湯**の関連処方を用いられます。

**肝陽上亢証と熄風剤**：気の停滞が長引くと陰液の不足が生じます(肝陰虚)。この虚熱証(肝陽上亢：のぼせ感、めまい感、耳鳴り)には**釣藤鈎**や**菊花**を含む**釣藤散**や**七物降下湯**が用いられます。抑肝散や半夏白朮天麻湯も関連処方です。

**心神不安証と安神剤**：肝気鬱結証から誘発される心神不安があります。これには**竜骨**や**牡蛎**を用います：柴胡加竜骨牡蛎湯や柴胡桂枝乾姜湯や桂枝加竜骨牡蛎湯。

### 日本漢方の病理論

日本漢方では**心肝火旺**や**肝陽上亢**などの病理を論じません。しかしながら**黄连解毒湯**、**釣藤散**、**抑肝散**などを気剤として用いています。

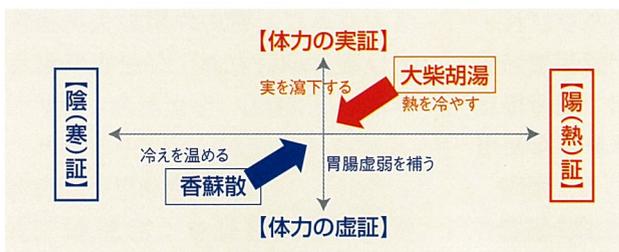
### 竜胆瀉肝湯

瀉肝は**心肝火旺**に用いる薬能を意味しています。日本では柴胡の配合されていない同名異物製剤もあります。その場合は四逆散と併用すると理気(瀉肝)作用が強化されます。

### 釣藤散

気むずかしい癩癢傾向の早朝頭痛や健忘症に用いられます。これをヒントにして軽度の脳血管障害性痴呆患者の夜間せん妄、睡眠障害に用いて有用であることが二重盲検比較試験で明らかにされました。Evidenceのある漢方製剤です。

## 5. 理気剤の日本漢方分類(図5)



### 日本漢方の証診断概念図

日本漢方の体力や反応性の虚実を縦(y)軸に、症候の寒熱(陰陽)を横軸(x)にするxy座標で表示する場合があります。

### 処方の治療ベクトル

実証を瀉下(少なく)し熱証を冷ます処方をxy座標の右上に配置し、虚証を補い寒証を温める処方を左下に配置します。原点へ向けた治療をするのです。

**Q:** 香蘇散は気滞という実証なのに、図では虚証側(x軸の下)に記載されているのは何故ですか？

**A:** この図の虚実とは日本漢方の体力(反応性)の虚実を示しています。香蘇散は胃腸虚弱の人(体力の虚証)に用いることが日本漢方の口訣ですから、虚証の位置に記載されています。(いい質問です)

## 6. 六君子湯の薬理と薬能(図6)

**病理の虚実夾雑**：加味逍遙散は肝気鬱結証という病理の実証と気と血の虚証の夾雑病態に用いる処方です。

加味逍遙散	実証	<ul style="list-style-type: none"> <li>気滞 ← 柴胡、薄荷、(山梔子)</li> <li>血瘀 ← 牡丹皮、(当帰)</li> </ul>
	虚証	<ul style="list-style-type: none"> <li>気虚 ← 甘草、茯苓、白朮</li> <li>血虚 ← 当帰、芍薬</li> </ul>

**孤独を好むCさん**：Cさんは気鬱で電車のシートの隅に座る傾向の半夏厚朴湯のイメージです。気虚と気滞痰飲という虚実夾雑病態です。(体力は日本漢方の虚証傾向)

半夏厚朴湯	実証	<ul style="list-style-type: none"> <li>気滞 ← 半夏、厚朴、紫蘇葉</li> <li>痰飲 ← 半夏、生薑、茯苓</li> </ul>
	虚証	<ul style="list-style-type: none"> <li>気虚 ← 茯苓</li> </ul>

### 気逆

動悸、焦燥感、頭痛、顔面紅潮、耳鳴り、冷えのぼせ、嘔気、咳嗽などから臓腑ごとに弁証されます。

### 日本漢方の加味逍遙散証

医療用製剤には「体質虚弱な婦人で肩がこり疲れやすく精神不安など精神神経症状とときに便秘の傾向のある次の諸症」に用いる指示があります。これは日本漢方の虚証の解説に相当します。図6の右側の赤い顔が気逆のイメージです。

### 鬱々とした人に香蘇散

胃腸虚弱でもの静かな人の頭重感に用いられます。半夏厚朴湯よりも内向性で意気消沈し何もできないような状態に用いるという口訣があります。